

働く人と働く時計

watch watching!

文/コザキユウ
写真/加藤啓介 (P4~5)
居和城茂 (P6~P8)

あなたの時計、
見せてください。

常に時間を意識し、
把握しなければならない、
「時計が絶対に欠かせない職業」の人がいる。
時間と絶えず
向かい合っている彼らは
どのように時計を
使っているのだろうか？



Toru Kamikawa

上川 徹

Referee

サッカー主審

1. ランニングタイムを計るのに使用する adidas の CLIMACOOOL。100試合分のメモリーを残せる。写真にある46分24秒の数字は、取材直前のJリーグの試合のもの。
2. ゲームを管理する上で大切なのは、早めに自分の判定基準をしっかりと選手に示すこと。選手の試合姿勢もそこで定まるという。
3. 2002年W杯の際、FIFAから支給されたPOLARの時計。消費カロリーや心拍数を計ることもできる。写真にある176の数字は最高心拍数。レッドカードを出すときなどによく記録されるぞ

この2つの時計から、W杯のドラマも生まれました

キックオフのホイッスルを吹く時間、試合時間、ロスタイムの把握……サッカーにおいて、時間は切り離すことができない。この重要な時間管理を、上川主審は2つのデジタル時計で行っている。

「私の場合、ランニングタイム用、ロスタイム用と使い分けて計っています。デジタルなのは、見やすさの点でアナログよりも把握しやすいからです」

開始時間は厳守される。このため、時計は試合前、正しくセットする必要がある。上川主審は、日常使用している電波時計(時刻が常に正確)で、試合前にランニングタイム用の時計の時刻を正確にセット。「腕時計を腕時計で合わせて」いるのだ。

ロスタイムの時間管理の場合は、秒単位ほどの厳密さはない。試合中、逐一時計に捕らわれて、ジャッ

ジをおろそかにしては本末転倒、考えてみれば当然のことだ。では、どうするのか。

「選手交代ならだいたいどれくらい、と、状況による大まかな時間を、経験的に掴んでいるんですよ」

時計をチェックできないときでも、こうした時間を頭で刻み、時間計算を常に行っているというわけだ。ちなみに、ロスタイム1分、というときは、1分から1分59秒までを「1分」とし(3分なら3分59秒まで。これは規定にも定められている)、その間で試合の流れが途切れたとき、終了とするそうだ。

上川主審は、正確な時計と、体に染み付いた時間感覚で巧みにゲームをコントロール、選手の作りだすドラマの陰で時間を操り、これからも数々の試合を演出してくれるだろう。

かみかわ とおる/1963年、鹿児島県生まれ。日本リーグの選手を引退後、審判に。1998年には国際主審となる。同年のアジアユース選手権(U-16)決勝大会を皮切りに、2001年のFIFAワールドユース選手権3位決定戦(決勝大会3位戦)主審は日本人男性として初)、2002年の日韓W杯(アイルランド・カメルーン戦)など、数々の国際大会の主審を務める。2006年のW杯ドイツ大会でも、主審の候補に挙がっている。

協力/財団法人日本サッカー協会



1. 愛用のグライダーに搭乗。このグライダーとともに、数々の世界記録を樹立してきた。もちろん、時計とともに。
2. 上昇気流を掴み、飛行をする。エンジンもつんでいないグライダーは、自然の力にまかせて飛翔。これが魅力のひとつ。
3. 会社の仲間からのお祝いでもらった、CASIOの気圧センサー付きの腕時計。非常にシンプルかつ、丈夫。グライダーの Cockpit はせまく、しょっちゅうぶつけてしまう。傷だらけだが、これまでベルト、電池交換以外、修理などはしたことがないそうだ。



Reiko Morinaka
森中 玲子
Pilot
パイロット



1. 看護師になった際、伯母から贈られた「ナース時計」を愛用。時間を見るための文字盤の内側に、患者の脈拍を計るための数字が細かく刻まれている。周辺は弾力あるコーティングがされているので、患者に当たってもケガをさせる心配がない。
2. 点滴の落ちる速度を合わせるときにも欠かせない。何秒間にどれくらい落ちるかを計り、終了時間に合わせて計算、点滴を設定する。
3. 仕事開始前にその日の患者の予定を確認し、分刻みでスケジュールを組み立てる。

Miyuki Fujima
藤間 幸
Nurse
看護師

時間をイメージで掴みやすいから、いつもアナログ時計です

グライダーの世界で、数々の記録を打ち立てている森中さん。なんとなく優雅で、時間に捕らわれない世界を想像しがちだが、実際、時間はどこまで大切なものなのだろうか？
「私がヘリコプターのパイロットをしていたころは、がぜん、『時計の世界』でしたよ。何時何分までに目的地に到達する、そのためにはこの地点からここまでは何分で到達しなければならないって」
正確な時間と戦うパイロットにとっては、ヘリにせよ、セスナ、ジャンボにせよ、かなり厳密な時間管理が重要だ。何分遅れたら燃料はどれくらい足りなくなる、という問題も密接に関わってくる。では、燃料のいらぬグライダーはどうか？
「時間管理はしにくいですね。何時くらいに戻っ

て予定で飛び立っても、気象などで条件がきっちり出せないものから」
時計がなくてもいいのかというと、やはりないと不安なものだとか。例えば500kmの飛行を行うために、何時何分にこの地点へ行けばいい、と飛行経路のイメージを掴むためにも大切なのだ。特にアナログウオッチだと、あと何時間飛べるといった感覚が、数字で表記されるデジタルよりも視覚的に捕らえやすいという。
彼女の時計は、1993年に高度の日本記録を打ち立てた際に、仲間からお祝いで貰ったアナログウオッチだ。この時計は、彼女の数々の世界記録の瞬間に立ち会ってきた。その歴史は、時計に刻まれた無数の傷が象徴している。

もりなか れいこ / 1962年生まれ。幼少の頃より飛ぶことに憧れ、大学時代よりグライダーを始め、プロの飛行機、ヘリコプターパイロットを経て、現在は外資系企業に勤務しながら、週末グライダーを(社)日本グライダークラブ(www.glider.jp)・板倉滑空場で楽しむ。1996年、南アフリカで動力滑空機自由距離飛行500kmの女子世界記録を樹立。近年では、2005年1月に自由三旋点距離1270.5kmなど2つの世界記録をアルゼンチンで達成。(社)日本女性航空協会理事。

約束の時間に1分遅れただけでも、患者さんは不安になるんです

ふじま みゆき / 1978年、静岡県生まれ。母親も看護師だったことから、看護の仕事に身近に体験。祖父の入院を機に、「お世話をする仕事」に憧れ、4年制の看護学校に入学。卒業後、聖マリアンナ医科大学病院の神経内科に就職し、現在にいたる。日夜、患者さんが気兼ねなく看護を頼めるようなナースを目指し、忙しい毎日を送る。藤間さんが着ているのは、動きやすく機能的にデザインされた看護師の制服。聖マリアンナ医科大学病院では、看護師=白衣という固定されたイメージからの脱却をはかっている。

「ナース時計」をご存知だろうか？ 職務中の利便性を考えて作られた時計だ。普段は胸ポケットや襟などにとめる。文字盤が180度回転しているので、ちょうど手に取ると自然な読み位置で文字盤を確認できる。この時計を看護師になってから5年間、使用している藤間さんに話を伺った。
「この時計は病院指定、というわけではないんです。ただ私の場合、担当する患者さんが寝たきりの方も多く、腕時計だと不都合も多いんです」
患者の介護の際、体に引っ掛かったり、処置などでは腕時計はジャマになりがち。衛生面から手洗いも多いので、両手がフリーになるナース時計は大変使いやすいという。また、文字盤は全面蓄光で消灯後の病室でも見やすい。脈拍や、点滴の

速度を計るにも便利。
こうした実用面以外でも、看護師は常に時間を意識するため、時計は欠かせない。仕事開始時には、まず患者の検査予定などをすべて把握し、はずせない時間、通常業務の時間を割り振る。分単位のスケジュールを組み立て、臨んでいる。業務遂行のためにも時計は必須だ。
「患者さんからコールが入ったとき『すぐ行きます』とは言わない。患者さんは、いつ来てくれるんだろう、と不安になります。だから、時計でちゃんと確認して『何分後に』とはっきり約束をするんです。まずは時間を守ることが大切ですね！」
看護師と患者の「信頼関係」を築くことにも、時計は役に立っているのだ。